

# 働く意欲が持てない？(2)

## —ニート、フリーター—

〈お茶の水女子大学公開講座「子育てのためのリスク管理論」から 十一月号掲載の続き〉

耳塚 寛明

### (4) 変わる高校生文化

高校生にしても、実は相当に変化をしております。かつてと比べると、学校生活が若者の生活に占める比重というものが非常に小さくなってきました。学校で過ごす時間自体も短くなっていきますし、また、友人も学校の外へと広がりを見せるようになりました。

フリーターを輩出する高校におけるデータですが、平日に家や塾で勉強を全くしない生徒は76・3%。病欠・忌引き・公欠以外の欠席日数(ほぼ十か月間で)が五日を超える者が22・5%。遅刻を21回以上した生徒が26%。赤点が一つもない生徒が44・8%というデータが得られました。勉強するというのは基本的な

生徒としての役割。学校に行く、休まないというのも基本的な生徒の役割。遅刻をしないなども同じです。こういう基本的な生徒としての役割を、十分に遂行する者たちが少なくなってきた、そこから逸脱をする生徒たちが現れるようになってきました。

では、基本的な生徒役割から離脱をして、一体その高校生はどこに行ったのかといえば、それは消費文化への接近ということになります。学校の外、それも消費文化への接近です。最近二か月間のバイト代の合計というのを採集しましたら、平均七万四千円。これはアルバイトをしている生徒たちに限ってです。通常の期間中ですが、この調査対象校では、二か月間で六割の生徒がアルバイト経験をもっていました。大半が販売サービスです。そこで稼いだ額が二か月で七万四千円ですから、一か月でいえば三万七千円。十五万円以上稼いだ生徒も15%近くいました。

これは相当な額であり、月に平均三万七千円のアルバイト収入です。家からもらう小遣いの平均が七千円

で、合わせると四万四千円になります。彼らは大人と同じ程度に、一人前の消費生活者であるということがいえます。

アルバイトをしていても、それぐらいのお金は少なくとも稼げるというわけです。こういう消費生活を維持することが、高校卒業後の最も優先順位の高いこととなるわけです。

アルバイトを通じてどう思ったか、ということを探ねてみると、「働くことのおもしろさを感じた」は、とてもあてはまる、まああてはまるは65・7%。これはアルバイトが職業意識の寛容に役立つという側面を表しているといえます。「お金を稼ぐのは大変だと思った」84・2%。これも結構なことです。しかし反面、「正社員になってもつまらないと思った」という生徒が60・5%。「バイトでもなんとか暮らしているか少ないと考えるかは別ですが、少なくとも三割を超える生徒たちが、バイトでもなんとか暮らしていけ

と思うわけです。アルバイトというのは、職業意識という観点からみれば両面性をもちますが、少なくとも、フリーターとして世の中に出ていく、心の手引きをしている側面というのは否定できないであろうと考えます。

私は大都市圏を中心に、このような脱生徒役割、生徒役割を逸脱して消費生活にウエートを置く高校生が現れてきた現象を、「パートタイム生徒の登場」として捉えています。四六時中生徒というわけではなく、時折生徒という役割を演じるという意味でのパートタイム制度であります。これは、高校生文化のうちに、無業者への道を準備させるという要因として考えているというふうに思います。

#### 四家庭的背景・教育選抜と高卒無業者

##### (1) 誰が無業者になるか

もう一つ重要なのは、誰が無業者になっていくかという問いです。少なくとも高卒者の問題として捉えて

みると、相対的に低い階層から無業者が出現しているということは、データから裏付けることができます。

たとえば、我々が実施した調査でも、ホワイトカラーの家庭の出身者でフリーターとなったのは14%、ブルーカラーの家庭の出身者だと31%というデータがあります。要するに、同じ高卒者の中でも、フリーターやニートになったのは、相対的に低い社会階層の出身者であったということがわかっています。

##### (2) なぜ、無業者になるのか

###### ① 「選抜」の帰結

なぜ相対的に低い階層の出身者が、高卒無業者となりやすいのか。相対的に低い階層を出自とする生徒たちが、高卒労働市場逼迫ひびくの直撃を受け、さらに経済的理由や家庭的背景から、進学機会を奪われるという、二重の「機会の喪失」の末に、高卒無業者となって、学校と職業世界の狭間にさまよい出ていく、というのが兆候としてあります。

そのメカニズムを考えると、第一に社会階層が学力、高校階層構造（いわゆる高校のランク）を媒介として、職業社会への移行様式と化している、つまり、教育の世界で学力に基づいて選抜することの帰結として、無業者が低階層の出身者に多くなるという仕組みがあります。

## ②「選択」の帰結

もう一つの仕組みは社会階層が、階層下位文化により、特定の進路の選択を促すということです。たとえば、親や兄弟姉妹がやはりフリーターとか無業者である場合が多いということに、すぐに気づきます。それで、これは選抜の結果というよりも、むしろ、自らそのような選択肢を選びとっている階層が存在するという仕組みが、ここにあることを考えさせられます。要するに、社会階層と結びついた選択の結果として、相対的に低い階層の出身者がフリーターやニートになる、というメカニズムを想定することができます。

このうちの、社会階層が学力を媒介として職業社会への移行様式と関連するというメカニズムについて、もう少し詳しく触れておきたいと思います。

私たちの研究グループが、小学校六年生の算数の学力テストを実施して、父親の学歴との関連を調査しました。そこからは、父親の学歴によって、子どもの学力には有利・不利が予め生じているということがいえます。

つまり、無業者の問題に引きつけていえば、低い階層の出身者というのは、努力が及ばないというわけではないけれども、確率的にいうと、低い学力にとどまる可能性というのは高い。そして、結果として、比較的ランクの低い高校に多くが進学している。そこから無業者の進路を選ばざるを得ない状況になる確率が高くなるという、学力を媒介にしたルートがあるわけです。

学力問題としても、非常に重要な問題を示唆している。それはどういふことかといえれば、学力を基準にし

て選抜をするということです。これは正当であると、一般的には信じられています。この大学も学力テストを行って、そのうちの良い得点の生徒を採ります。

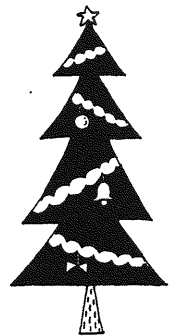
しかし、それは、さらにいえば、学力によって選抜をするということが、実は社会階層によって選抜をするということ・生徒がどういう家庭に生まれたかということによって、選抜している側面を含んでいる、ということになります。初めから、公平な競争の結果ではない要因を含んでいるということです。

もう一つの調査結果があります。私共の大学で、21世紀COEプログラムというのを進めており、その一環として行われた、小学校六年生の算数のテスト（受験塾への通塾の有無で調べた）の結果です。受験塾に通っていない子どもたちの得点は、頂点が30点以上40点未満のところになります。ところが、受験塾に通っている子どもたちの得点の分布は、一番多いのは90点以上のところです。両者の分布は全く違うといわなければなりません。この背景には、受験塾に通塾させる

ことができるという経済力が前提になって存在をするわけです。

父親の学歴が大卒か非大卒かによって、学力がどう違うかについての調査では、受験塾への通塾の有無ほど、学力の分布が違うわけではありません。しかし、父親が大卒の子どもたちというのは、非大卒の子どもたちに比べると、およそ20点くらい高いほうにシフトしています。

仮に、我々が実施したCOEのこの調査を、私立中学校の入学者選抜試験に使ったとします。合格者はどういう構成になるか。現在の普通の学力テストをする時、そのテストで高得点を占めるのは受験塾に通塾している者、それから父親の学歴の高い者を、非常に高い率で選んでしまうということになります。この問題



は、立ち入りすぎたかもしれませんが、フリーターやニートを生むメカニズムの問題です。つまり、学力を媒介として、フリーターやニートへの選択を選び取らせてしまう道へ進ませてしまうという問題として、これらのデータを私は使いたかったわけです。

### おわりに

私は、フリーターやニートという現象について、「いろいろな見方がある」「必ずしも若者の職業意識とか、働く意欲に原因を求めるという対処法は妥当ではない」「(それに伴って)若者の職業意識や意欲に働かせる政策は限界がある」ということを言いたいです。

その限界とは、構造的な要因によります。一つは職業世界からの引き上げる力 (pull) が弱くなってきていると同時に、学校教育が若者たちを職業世界に送り込む力、押し込む力 (push) も弱くなっているということを言いました。

そして、この pull と push の力が弱まった結果として、ニートとかフリーター、要するに無業者という空間に誰が引き込まれていつているのか、という問題を話しました。それは決して、誰でも同じ確率で無業者空間に吸い込まれていつているわけではない。相対的に低い階層を出自とする若者たちが無業者空間に引き込まれやすいのだということを、学力を媒介としたメカニズムと、社会階層によって選択、価値観自体が違ふという二つのメカニズムによって説明しました。

こう考えてみると、働かない若者たちの問題を、ニートという言葉を使つて、意欲の問題として理解してしまうというのは不十分な見方であり、問題が残ってしまう、ということはおわかりいただけだと思います。どうも、現代社会というのは、どういう現象も心に原因があるという問題として理解してしまう傾向が強いように思います。これは心理重視などの言葉でも批判されているところですが……。ニートという概念もその一つです。ニート、働かない若者たちの原因

を、若者の心に求めてしまうという、誤った解釈の仕方、それこそがニートという言葉を生んだのではないかと思います。

これは社会的に見ても問題を招きます。第一に、個人の努力によつてでは、問題を解決することが不可能な状況においても、なお、一人ひとりがんばれ・意欲をもてというメッセージを送り続けることになつてしまう。第二に、個人の心が注目されてしまうあまり、個人を取り巻いている制度とか組織とか、構造とこの言葉を使いましたが、その構造のあり方に、人々の関心を向けない、向かないという状態が生まれてしまう。そのために本当の原因をつくり出している構造に対する改革が、一向に進展しなくなるという結果を招いてしまいます。

ニートには、引きこもり型というイメージが付与されているのです。しかし、雇用される機会がない、機会が乏しい時に、引きこもってしまうのは若者だけの

問題でしょうか。そんなことはありません。我々大人でも、困難に直面した時に、つい引きこもる、やる気がなくなつてしまつて、引きこもらざるを得なくなる状況に置かれるわけです。つまり、引きこもりのイメージが与えられて、結果として、そういう若者は現れるかもしれません。それは若者自身の心の問題として解釈してはいけないのではないかと主張したかったわけです。

ニートという概念を通して、見なければならぬのは、今の若者の心の欠陥ではなくて、数十万にも及ぶ若者をニートへの道へと向かわせてしまう、脱出を困難にさせている社会の仕組みのほうだということを申し上げたかったです。

（お茶の水女子大学）

（講演 平成十八年二月十六日）

☆抄録責任 編集部